

『國體の本義』対『日本文化の問題』

—— 國體論をめぐる闘争 ——

1、東洋文化と西洋文化の狭間

植 村 和 秀

幕末における西洋の衝撃は、それ以降の日本の変容を決定的に特徴付けてきた^①。清帝国を敗北させる軍事力、機械と技術に支えられた経済力は、当時の日本に圧倒的な印象を与えたのである。しかも西洋諸国は、軍事力や経済力のみならず、社会的・文化的な魅力によっても日本に衝撃を与えたこととなった。西洋流の生活様式、西洋流の思想とその実践は、ジョゼフ・ナイの言葉を借りれば、西洋諸国のソフトパワーとして、日本人の心を大きく揺り動かしたのである^②。こうして、西洋に関する知識が広く求められるようになり、日本は急激に西洋化を進めていった。そしてそれによって、近代化を実現していったのである。しかし、昭和の敗戦まで順調に見えた日本国家の発展には、独特の困難がつきまとっていた。それは、西洋化によって古い日本が失われ、日本が精神的に空虚になっていく、という困難である。これに対する危機感は、例えば小説家の夏目漱石の警世の文に見事に表現されている。優れた文明評論家でもあった漱石

は、「現代日本の開化」と題する一九一一年の講演の中で、日本人は「誠に言語道断の窮状に陥った」と述べ、外発的な開化の弊害を、以下のように解説している。

「ところが日本の現代の開化を支配している波は西洋の潮流でその波を渡る日本人は西洋人でないのだから、新しい波が寄せる度に自分がその中で食客をして気兼ねをしているような気持になる。……こういう開化の影響を受ける国民はどこかに空虚の感がなければなりません。またどこかに不満と不安の念を懐かねばなりません」。

それでは、日本はどのようにすれば良かったのか。国粹を保存し、日本文化を再評価しようとする思想と運動が存在した。仏教、あるいは儒学を振興し、それによって東洋文化を再興しようとする思想と運動も存在した。しかしそれらは、日本の西洋化路線を放棄させるに足る実績を示したり、説得力を発揮したりすることはできなかった。日本は西洋化路線を継続し、一貫して西洋文化を受容し続けていったのである。

日本が西洋化路線を継続したのは、十分な理由があった。まず第一に、西洋諸国の軍事力や経済力がますます強大化し、日本国家はそれらと競争し、場合によっては対抗する必要があるが続けた、という理由である。そして第二に、西洋諸国では社会的にも文化的にも多様で活発な発展があり、それらが日本に暮らす人々にとって魅力的であり続けた、という理由である。しかもこの西洋化路線によって、日本国家は西洋列強に匹敵する強国となった。一八六八年に明治維新を断行した日本は、一九二〇年に国際連盟の常任理事国となったのである。

ただし、このような西洋化路線には、夏目漱石が見通したような深刻な精神的危機が伴っていた。日本国家が政治的・軍事的に強大化する一方で、日本人の精神的な空虚感はいまさらなかったたのである。そして、その空虚さを埋めるものとして、大正時代から昭和時代初期にかけて、さまざまな思想や宗教が流行した。西洋志向の教養主義やマルクス主義、日本志向の教養主義、古くからの仏教諸宗派、仏教や神道などに基づく新興宗教が、多くの人々の心を捉え、

人生の意味を提供するものとなったのである。

さて、昭和時代の始まる一九二六年頃は、江戸時代を記憶する人がほとんどいなくなる時期でもあった。漱石は早くに亡くなったが、幕末の一八六七年に生まれた彼の世代でさえ、この頃に還暦を迎えていた。それはつまり、西洋化路線が本格的に始まる前の日本を体験した日本人がほとんどいなくなった、ということである。そして、古い東洋文化の中で生まれ育った世代がいなくなるこの頃に、日本と西洋諸国の政治的対立は激しさを増したのである。

西洋諸国との対立に際して、日本側の一部では、精神的な拠り所を求める気運が高まっていった。もちろん、力そのものに全面的に依存し、強大さを至上の価値と考えて満足できる人々はいた。しかし、日本思想の精神的価値を高めていこうと考える人々もいたのである。そこで問題になったのは、日本文化と西洋文化と東洋文化の関係をどのように理解するか、ということであった。それでは、どのような思想的試みが行われたのか。以下に検討してみよう。

註

(1) 日本における西洋の衝撃に関しては以下参照。G・B・サンソム、金井圓・多田実・芳賀徹・平川祐弘訳『西欧世界と日本』上・下、筑摩叢書、一九六六年。平川祐弘『西欧の衝撃と日本』、講談社学術文庫、一九八五年。

(2) ナイは、ソフトパワーとは「強制や報酬ではなく、魅力によって望む結果を得る能力」であり、「国の文化、政治的理想、政策の魅力によって生れる」ものであると定義し、軍事力や経済力のようなハードパワーとともに、国際政治に重要であると主張している。ジョセフ・S・ナイ、山岡洋一訳『ソフト・パワー——21世紀国際政治を制する見えざる力』、日本経済新聞出版社、二〇〇四年、一〇頁。

(3) 三好行雄編『漱石文明論集』、岩波文庫、一九八六年、三六頁。

(4) 『同』、三三頁。

2、『國體の本義』

『國體の本義』は、文部省によって編纂され、文部省管轄の諸学校に配布された。その刊行について、一九三七年四月一〇日付の読売新聞は、「文部省から國體読本」と題し、以下のように報じている。

「昨年五月國體明徴の時流にのつて文部省が計画した『國體読本』が漸く完成した。……これこそ文部省が『官』の名を以て國體本義に決定的定義を下したと見るべきものである。思想局は一〇月一日から教学局の中へ解消することになっていたので、これを最後の置土産として三十万部を印刷、九日全国の大中小学校、諸官庁、団体に発送した」⁵⁾。

ただし、『國體の本義』が「決定的定義」であると言えるかどうかには疑問がある。その理由として、何よりもまず、文部省による編纂が、文部省に近い関係者の意見を寄せ集めて大急ぎで行なわれた、という経緯が挙げられる。『國體の本義』の編纂開始は一九三六年六月であり、国文学者で国民精神文化研究所助手の志田延義が草案を作成した。この草案は、文部省直轄の国民精神文化研究所関係者が過半数を占める編纂委員会で審議され、さまざまな調整の後、一九三七年二月に編纂完了となる。決定的と呼ぶには、あまりに拙速な編纂である。⁶⁾

文部省が編纂を急いだのは、この事業が文部省の昭和十一年度事業の一つであり、年度内に本を刊行して予算を執行しなければならなかったからである。実際には本の刊行は四月になったが、刊行の日付は文部省発行版では三月三〇日となっている。そして、五月三一日付で内閣印刷局から一般向けに刊行され、その発行部数は、敗戦までに総計二百万部を超えた。つまり、『國體の本義』は形式的には「決定的定義」に見えるものであり、量的にもそう見えるものであるが、しかし質的には、とてもそのようには言えないものである。

それでは、『國體の本義』の内容は、どのようなものだったのであろうか。総計一五六頁の『國體の本義』は、「緒

「言」、「第一 大日本國體」、「第二 国史に於ける國體の顕現」、「結語」によって構成されている。第一はさらに、聖徳、臣節、和と「まこと」に分けられ、第二はさらに、国史を一貫する精神、国土と国民生活、国民性、祭祀と道徳、国民文化、政治・経済・軍事に分けられて、古事記、日本書紀などからの引用文が適宜配置されている。全般的に説諭口調であり、読みにくい難解な文体である。

論旨の基本的な方向性は、日本の國體による西洋文化の醇化である。儒教や仏教といった東洋文化をかつて撰取醇化したように、明治以降に撰取した欧米の近代文化を今こそ醇化して、新しい日本文化を創造しなければならぬ、というのが、『國體の本義』の主張なのである。そしてそのためには、外来思想が「我が国情に適するか否かが先づ厳正に批判検討」されねばならないとされ、西洋文化の根柢にある「個人主義的人生觀」が、強く拒絶されることとなる。⁽⁸⁾

「現今我が国の思想上・社会上の諸弊」は、日本の國體と相容れない西洋の個人主義に一部の日本人が盲従したことに起因する、とされるからである。⁽⁹⁾

こうして『國體の本義』は、日本の西洋化路線に批判的な立場を取る。ただし、『國體の本義』は同時に、西洋文化の排撃を強く戒めてもいる。日本の国民性の優れた特色として、「包容・同化の精神」が強調され、東洋文化を「撰取醇化して皇道の羽翼」としたように、西洋文化も積極的に撰取醇化すべきことが力説されるのである。⁽¹¹⁾

そしてその結語には、「世界文化に対する過去の日本人の態度は、自主的にして而も包容的であった」との一文があり、⁽¹²⁾ 國體明徴は西洋排撃でないと繰り返し主張されるのである。

さて、このような方向性は、文部省の意向であり、とりわけ思想局長の伊東延吉の意向であった。編纂会議の席上、伊東局長自身がこの方向性の堅持を力説したと、草案執筆者の志田は回想している。⁽¹³⁾ ただ、伊東たち事務局の意向は必ずしも編纂委員たちの意見を拘束できず、しかも編纂委員の間で、意見が対立することもあった。しかし、真剣な調整

を行なうには、日程に余裕がなさすぎた。また、そう簡単に意見が一致することもないであろう。そのため、意見が対立する部分は削除され、誰も異論を唱えそうにない無難な説明が、ひたすら説諭口調で続くこととなったのである。

『國體の本義』は、争点を回避して作成された。そしてその結果、日本の國體は優れており、日本文化の独自性は素晴らしく、東洋文化を日本的に活用したように、西洋文化も日本的に活用すべきである、と述べるだけになった。すなわち、日本文化の独自性はどのように形成されたのか、どのように東洋文化を活用したのか、西洋文化を活用するにはどうすればいいのか、といった問題は言及されなかったのである。しかしこれでは、何も創造できはしない。新しい日本文化を創造しなければならぬと主張しつつも、そのための手がかりが提案されず、そのための工程表も示されないからである。

ただし、文部省が『國體の本義』を刊行したという事実は、敗戦までの日本に大きな影響力を及ぼすこととなった。文部省の威光を背景に、『國體の本義』は教育界などに大量に流通し、政府公定の定義という意味を獲得していったからである。しかも文部省にとって、『國體の本義』は便利な文書であった。『國體の本義』は、日本國體に基づく文教政策を説明するための指針を提供したのである。それは一方では、研究者や教育者を統制する基準になるとともに、他方では、陸海軍や他の諸官庁に対抗して、教育界への外部からの介入を防止する根拠ともなった。『國體の本義』という名称を用いた文教政策に対して、誰も正面から反対することはできなかったのである。

このような文部省の意向に対して、哲学者の西田幾多郎は深い憂慮を抱いていた。西田は、親友の山本良吉に宛てて、「文部省が精神文化研究所一派の考を無上命法とし之によって思想統一を計り却つて青年に疑惑を抱かしむるとの御考全く御同感の至りに存じます」と書き送っている¹⁴。この書簡は一九三七年十二月二日付のものである。日本がまさに世界に直面している時期に、文部省が内向きの組織防衛に走り、日本の未来を真剣に考えようとしていない、と西田は判

断した。そして、このような情勢判断に基づいて、西田は、日本文化と西洋文化と東洋文化の関係について、自らの考えをできる限り平易に語ろうと動き出したのである。

註

- (5) 『新聞集成昭和編年史』十二年度版Ⅱ、新聞資料出版、一九九〇年、一〇四頁。
- (6) 植村和秀「古典を読む 國體の本義」荻部直・黒住真・佐藤弘夫・末木文美士編『場と器——思想の記録と伝達（岩波講座 日本思想 第二巻）』、岩波書店、二〇一三年参照。
- (7) 文部省編纂『國體の本義』、内閣印刷局発行、一九三七年、一四三頁。なお、文部省発行版と内容は同一である。
- (8) 『同』、一五〇頁。
- (9) 『同』、三頁。
- (10) 『同』、九七頁。
- (11) 『同』、一四八頁。
- (12) 『同』、一五六頁。
- (13) 志田延義『昭和の証言』、至文堂、一九九〇年、三七頁。
- (14) 山本良吉宛西田幾多郎書簡『西田幾多郎全集』第二巻、岩波書店、二〇〇七年、九三頁。

3、西田幾多郎の「学問的方法」

一九三七年十月九日に、西田幾多郎は「学問的方法」と題する講演を行なった。これは、東京での日本諸学振興委員会哲学公開講演会における講演であり、当時の西田は京都帝国大学の名誉教授であった。この委員会は文部省の教学局

が運営するものであり、その官僚たちは、まさにこの年の春に『國體の本義』を刊行したばかりである。⁽¹⁵⁾

ここで西田は、「我々の歴史的文化を背景として新しい世界文化を創造すると云うのは如何にして可能であるか」という問いを發している。⁽¹⁶⁾ 新しい日本文化の創造ではなく、新しい世界文化の創造を主張し、その創造を日本から行なっていくための方法を考えよう、とするのである。その際、西田は、西洋文化を明治以来学んできた「我々は今後も学ぶべき多くのものを有ち、何処までも世界文化を吸収して發展し行かなければならない」と述べている。⁽¹⁷⁾ これは、日本が西洋文化を一方的に利用するという『國體の本義』の安直な論調に反対する、ということであろう。

さてそれでは、西田は、どのようにすれば日本から世界文化を創造できると考えるのであろうか。西田によれば、そのためにはまず、日本精神が国内志向から世界志向に転換する必要がある。西田は、「我々の歴史的精神の底から（我々の心の底から）、世界的原理が生み出されなければならない」と主張するのである。⁽¹⁸⁾ そして、世界志向に転換するためには、日本精神が学問的になる必要がある、と力説する。つまり、感情的反発や独断を排して、日本精神が「嚴密なる学問的方法によつて概念的に構築」されなければならない、すなわち「理論を有つ」ようにならなければならない、と力説するのである。⁽¹⁹⁾

西田は、このような学問的方法が東洋文化において發達せず、「今日西洋文化に押されがちなのは之による」と考える。⁽²⁰⁾ そして日本においても、学問を単なる道具のように考えて、その安易な活用を説く弊風があると警告する。西田の考えによれば、真に西洋文化を乗り越えたいのであれば、世界の文化をさらに深く吸収し、深く体得し、そうしてはじめて乗り越えが可能になるのである。

それゆえ、日本文化の素晴らしさは日本の歴史に証明されており、かつて東洋文化を活用したように、今は西洋文化を道具として活用すればよい、という『國體の本義』の主張は、西田にとつて、軽率な謬見に他ならない。実際、この

文部省主催の公開講演会において、文部省編纂の『國體の本義』はきわめて率直に批判されている。さすがに書名は挙げられないものの、以下のような批判が語られるのである。

「無益論、我々が我々の文化を明らかにするには、我國の歴史について、我々の歴史的な文化を研究せなければならぬ、徹底的に学問的に研究せなければならぬ。そしてそれが我々の考の基となるであろうことは言うまでもない。しかしそれによって単に特殊性を明らかにするだけでは、今日の世界歴史の舞台に於て生きて働く精神とはならない。我々は理論を有たなければならぬ。此処に今日の我国文教の指導精神がなければならぬと思う。単に明治以来外国文化輸入の弊に陥ったから、今から東洋文化を中心にすると言うのでは単なる反動に過ぎない。口には外国文化を排斥するのではなく、日本精神によって世界文化を消化すると云うも、それが如何にして可能なるかについて深く考えられていない。我が国に於ては、いづれの学問に於ても尚深い根本的な理論研究は微弱であると思う」²¹⁾。

つまり西田は、西洋文化と東洋文化を深く尊重し、その真義に徹する努力を重ね、その上で、西洋と東洋を含む世界文化を発想していくべきと考へるのである。「我々は深く西洋文化の根柢に入り十分に之を把握すると共に、更に深く東洋文化の根柢に入り、その奥底に西洋文化と異なった方向を把握することによって、人類文化そのものの広く深い本質を明らかにすることができるのではないかと思う」²²⁾。西田のこの発言は、西田の哲学が目指すものを端的に明らかにするものである。

この講演の後、西田はさらに踏み込んで、日本文化の問題に取り組んでいく。西田は、一九三八年の四月から五月にかけて、京都帝国大学生課主催の連続公開講演会で「日本文化の問題」について語っている。その際には、「学問的方法」が参考資料として聴衆に配布されている。そして西田は、改めて原稿を作成し、「学問的方法」を附録に加えて、一九四〇年の春に岩波新書の一冊として、『日本文化の問題』を刊行するのである。

註

- (15) 駒込武・川村肇・奈須恵子『戦時下学問の統制と動員——日本諸学振興委員会の研究』、東京大学出版会、二〇一一年参照。
- (16) 西田幾多郎『日本文化の問題附録 学問的方法』（一九三七年）『西田幾多郎全集』第九卷、二〇〇四年、八七頁。
- (17) 『同』、八七頁。
- (18) 『同』、八八頁。
- (19) 『同』、八八頁。
- (20) 『同』、八九頁。
- (21) 『同』、九三頁。
- (22) 『同』、九一頁。

4、西田幾多郎の『日本文化の問題』

京都帝国大学での公開講演会において、西田は、改めて日本と世界の関係について述べている。以下の発言は、「日本文化の問題」と題した連続講演会の第二回、一九三八年五月二日のものである。

「それについて一番普通の考え方は、日本精神で西洋文化を消化して行こうと云うのだが、これはどんなものかとうと、つまり昔の和魂漢才という言葉で表わされる態度に似たものである。つまりそういう人は、日本精神という特別のものが（私も無いとは云わぬ……）それを中心として外国文化をまとめ綜合しようとするのである。……之は最も浅薄なよくない考え方と思う。彼等は例えば自然科学はそれ自身の生きた精神をもたぬ道具みたいなものと考えて、そんなものではない。是迄の日本精神は科学的文化にぶつかからない前の文化である。そこでそれが科学とぶつかった時

に日本精神は全く科学に負けてしまいか、さもなくば科学を非科学的なものにするかより外ない。このことを日本精神を説く人は、あまりに簡単に考えている弊があるかと思う。何か日本精神というものを独断的に考え、結論をきめておいて西洋の哲学や科学から都合のよいものだけを集めるのではない⁽²³⁾」

ちなみに『國體の本義』は、日本は日本文化を「豊富にし発展せしめるために外来文化を撰取醇化して来た」と主張し、和魂漢才という言葉为例として挙げている。西田は、そのような安直な考え方を厳しく斥けたのである。西田は、「歴史的文化を背景として我々の新しい文化を創造するにはどうするか」が重要であると四月二十七日に語り、その重大性と難しさが過小評価されていると、五月九日に語っている。西田は聴衆に、問題の所在と意義を正確に理解してもらいたかったのである。

西田はこのような批判を、岩波新書版の『日本文化の問題』でも述べている。それはつまり、日本文化の特殊性を自画自賛して、それ以上深く考えようとしない知的風潮が当時流行していた、ということに他ならない。ここで西田は、「今日日本文化が世界文化として考えられ、世界文化として発展するには、それが如何なる意味に於て、又如何にしてと云うことが考えられねばならない」と指摘し、「而してそれは又東洋と西洋とが一つの世界となった今日、東洋文化が如何なる意味に於て世界文化として、将来の世界歴史に貢献するかと云うことであろう」と問題提起する⁽²⁷⁾。特殊性に自己満足するのではなく、世界史的課題に取り組みことが、世界の他の国民と同様に、日本国民の課題であると主張するのである。

西田がこのように主張するのは、世界が真に世界的世界となったのが現代である、と考えるからである。西田は、人間が今をはじめ、東洋も西洋も含めた世界を舞台として実質的に生きるようになった、と考える。そして、その中に存在する日本もまた、国内志向から世界志向に転換する必要があると説く。ただしその際に、西田は世界文化がすでにあ

ると主張するわけではない。世界文化を人間が作り出していかねばならない、と主張するのである。

それでは、人間が世界文化を作り出していくためには、どのようにすればいいのだろうか。西田は、それぞれの国民がそれぞれの歴史を踏まえて、その内側から新しいものを作っていくことを提案する。日本の場合であれば、日本の歴史を踏まえて、そこから世界的なものを作っていくことを提案するのである。日本文化と西洋文化と東洋文化の関係は、そこで非常に重要となってくる。西田は、西洋文化と東洋文化をともに創造的にする考え方を、両者を受容した日本から提案しようと呼びかけたのである。

しかし、日本から世界文化の創造を目指すことは、いわば、立候補の表明であって当選証書の受け取りではない。それゆえ、日本が世界文化の創造に立候補することに関心を持たない人々、日本はすでに世界文化に当選済みであると考ええる人々は、西田のこの主張を誤りであると断定するはずである。また、そもそも文化に関心を持たず、政治的・軍事的な力のみを重視するような人々は、このような主張に耳を傾けることをしないであろう。西田の主張は、当時の日本において、無理解と敵意に囲まれてしまうものだったのである。

西田が目指したのは、西洋文化と東洋文化を、それぞれの根柢から把握し、それらを踏まえて新しい世界文化を創造していくことであつた。そしてその可能性は、欧米や中国よりも日本の方が大きい、と主張したのである。哲学者の下村寅太郎によれば、そのような「東西の包容」という志向性自体は、決して西田に限るものではなく、日本思想史の中に強く認められる特徴であつた。⁽²⁸⁾そして下村は、西田哲学の意義は、その包容の実践を「絶対無の原理」として初めて論理化したことであつた、と評価するのである。

「この原理はこの目的のために新しく作為されたものというよりは、受容即包容の仕方では思惟してきた伝統的な考え方
の原理的自覚にほかならない。常に受容を媒介にして発展してきた日本の思想史の根柢に存しこれを貫く思惟の仕方

の自覚的な形成である。それはいかに異質的な思想をも、その優秀性を認める限り、積極的にこれを受容し、しかも既存のものを否定排除せず共存せしめるという独自の思惟の仕方である。論理的にいえば、これは個体的なるものをその個性性において包容し得る如き普遍的原理の探求である。これが「限定して限定せず、限定せずして限定する絶対無の自己限定」の論理として定式化される。それ自身の固定した限定された論理をもつものにはかかることは不可能である。そこでは必然的に対決的批判的拮一的思惟しか成立し得ない。かかる立場では受容即包容的な思惟の仕方は折衷としてしか理解され得ない。しかしそれは矛盾律を根本原理とする対決的拮一的な思惟の仕方の制限に他ならぬ。これはもとより一つの重要な思惟の仕方である。哲学や科学をこれから産出した。しかしこれを唯一の思惟の仕方とする理由はない」²⁹。

下村寅太郎は、哲学者の西谷啓治と並んで、西田哲学を最も深く体得した人物である。しかし昭和十年代の日本において、西田哲学はこのように深く理解されず、それどころか、学問的にも政治的にも強い非難を受けていくことになるのである。

註

- (23) 西田幾多郎「日本文化の問題」(一九三八年)『西田幾多郎全集』第一三卷、二〇〇五年、一四〇―一五頁。
- (24) 『國體の本義』、一一四頁。
- (25) 『西田幾多郎全集』第一二卷、六頁。
- (26) 『同』、二二頁。
- (27) 西田幾多郎「日本文化の問題」(一九四〇年)『西田幾多郎全集』第九卷、六―七頁。
- (28) 下村寅太郎「日本の近代化における哲学について」(一九六五年)『西田哲学と日本の思想 下村寅太郎著作集第一二卷』、

みず書房、一九九〇年、五四七頁。

(29) 『同』、五四六～五四七頁。

5、国内志向と世界志向の思想的対立

『日本文化の問題』は、刊行後一週間で四万冊売れた。西田の知的な影響力は大きく、それゆえ敵意も招き寄せていく。西田は刊行後まもなく、「これは一方の人々には耳痛いこともある故或はますますそういう反感を高めるのではないかとおもいます」と、出版社主である岩波茂雄に書き送っている。⁽³⁰⁾

実際、西田はさまざまな方面の敵意と無理解に直面していった。文部省は意外なほど、西田に対して低姿勢であったが、しかし西田の意見を容れるわけではなかった。他方、『國體の本義』の編纂委員の中には、日本が世界文化の創造に立候補することに関心を持たない人々がいた。例えば、教育学者の吉田熊次である。

吉田は東京帝国大学名誉教授であり、『國體の本義』編纂時は国民精神文化研究所研究部長であった。吉田は、一九三六年十一月に『國體明徴の方法原理』と題する小冊子を刊行している。その中で吉田が批判するのは、日本国内で思想的統一がなされていない、ということである。家庭の中でも学校の中でも、思想的統一のために努力しなければならぬ、と吉田は熱心に説く。しかし、その理由や方法について、特に何も論じようとはせず、世界的な視線は皆無である。⁽³¹⁾

同様の人物として、哲学者の紀平正美を挙げてもいいであろう。紀平は、東京帝国大学文科大学哲学科の卒業生であり、編纂時は国民精神文化研究所事業部長であった。紀平は、国民精神文化研究所設立十周年に際して、日本が真の日

本になれば世界を動かす、と何の根拠も示さず主張している。これは、一九四二年六月四日付の文章であるが、独断的な信念を表明するだけで終わっているのである。⁽³²⁾

このような人々からすれば、西田の発想は、まさに、世界志向の有害な謬見となるであろう。彼らは、日本国内に思想的な統一が実現しさえすれば、西洋文化と東洋文化の両方を道具として使えるはずであり、そのためにはますます国内志向であるべきである、と考えるからである。しかも、『國體の本義』の刊行から『日本文化の問題』の刊行にかけての時期は、蓑田胸喜を代表とする原理日本社の同人たちが、さかんに知識人弾劾を行っていた頃でもあった。蓑田たちは『國體の本義』編纂に関与できなかったが、文部省への接近を試みていた。そして西田は、有害な知識人として彼らに執拗に狙われていたのである。

蓑田たちの攻撃は政治的なものであったが、しかし実は、思想的な主張を基礎とするものでもあった。そして意外なことに、蓑田たちは、西洋文化と東洋文化の包容を志向するのみならず、世界について積極的に語ってもいた。それは例えば、原理日本社の結社宣言に端的に現われている。その宣言では、日本は「その発祥地と経由地とに於ては既に滅びんとしつつある東洋文明の伝統と理想との現実的支持者としての自主国家であり、その内部より没落破滅が叫ばれつつある西洋文明をも総攬しつつあるところの、東西洋文明の集中融合地点として既に確立せられたる無極生成の『世界文化単位』」である、と断言されていたのである。⁽³³⁾

蓑田たちは、西洋文化も東洋文化もすべて日本に吸収済みであり、日本文化はすでに世界文化であると断言する。そしてそれゆえに、世界文化を作り出していこうと呼びかける西田に対して、憎しみの目を向けるのである。彼らは、西田が日本を侮辱していると弾劾する。世界志向に見えて、実は世界を拒絶する彼らは、彼らの宣言を認めない西田は日本の敵である、と主張するのである。⁽³⁴⁾

そしてもちろん、そもそも文化に関心を持たず、政治的・軍事的な力のみを重視する人々は、西田の主張に耳を傾けることをしなかった。西田は、東條英機政権の政策を変えようとして、東條の腹心である陸軍の佐藤賢了軍務局長に建議書を提出している。「世界新秩序の原理」と題されるこの建議書は、いわば、日本が世界史の新しい時代を創造するための選挙公約として提出された。西田は、日本政府がこの公約の実現に努力することを願ったが、その政策に西田の提案が反映された形跡はない。東條首相はきわめて実利的に、軍事力や経済力のみを重視していたのである。⁽³⁵⁾

註

- (30) 岩波茂雄宛西田幾多郎書簡『西田幾多郎全集』第二二卷、三二四頁。
(31) 吉田熊次『國體明徴の方法原理』、国民精神文化研究所、一九三六年参照。
(32) 紀平正美「十年間」『国民精神文化』第八卷第九号（一九四二年一〇月）、八七二頁。
(33) 「宣言」『蓑田胸喜全集』第七卷、柏書房、二〇〇四年、六八五頁。
(34) 植村和秀『日本』への問いをめぐる闘争——京都学派と原理日本社』、柏書房、二〇〇七年、第五章参照。
(35) 植村和秀「国家と歴史の側から、西田幾多郎を問ひなおす」『西田哲学会年報』第七号（二〇一〇年七月）参照。

6、巨大な国家と精神的空虚さ

結局、西田の提案は日本政府の政策とはならなかった。そしてそもそも、そのような見込みはまずなかった、と言えるであろう。二〇世紀において、国家はあまりに巨大なものとなった。近代化の成功は近代国家の巨大化をもたらし、その運営のために、組織化が徹底されねばならなくなったのである。国家を運営するのは人間であるが、巨大国家は人

間を道具として利用する。思想もまた例外ではなく、国家によって道具として利用されてしまふのである。

その典型的な例が、ソ連国家だったのでないだろうか。マルクス・レーニン主義思想に基づいて作られたはずのソ連国家は、その存続と発展のために、この思想さえ道具として利用していった。そこには、思想の価値に対する積極的な評価が認められないのである。もちろん、ソ連流の生活様式、ソ連流の思想とその実践に魅力を感じた人々は、世界に多くいた。しかしそのような魅力は、時とともに減衰していったように思われてならない。

そして、西田が直面した日本国家も組織的に運営されており、あらゆるものを利用しようとする傾向があった。『國體の本義』はまさに、組織運営上の便利な道具に他ならなかったのである。それゆえ、西田がいくら『國體の本義』を批判しても、利用価値が思想の価値よりも優先され、『國體の本義』の流通は止まらないのである。西田の動きは、政治的に失敗に終わった、と言うべきであろう。

しかも、日本文化の特殊性を自画自賛して、それ以上深く考えようとしないう風潮は、西田の動きにとって逆風となった。そのような風潮に立脚した人々が、西田に対して猜疑と不信の目を向けたからである。それにしてもなぜ、多くの人たちが、この風潮に引き寄せられたのであろうか。そこには、漱石が憂慮した精神的空虚さがあつたのではないだろうか。敗戦後まもなく、哲学者の西谷啓治は、日本の精神的空虚さは敗戦によって生じたものではない、と指摘した。西谷は、「宗教的な立場は、既に戦争のずっと前から、日本人の心に失はれていた」と述べ、精神的空虚さは敗戦よりるか以前から存在していたと痛嘆するのである。

「昔の日本人にはかかる基礎があつた。仏の道とか天道とかが、その精神に不動な超越的根拠を与へてゐた。……然し明治の中頃から以後、仏教や儒教は最早かかる基礎を与へ得なくなつた。吾々の人生観や世界観の核心となり得なくなつた。然も同時に移植された西洋文化は、技術、経済、法律、政治の面、或は学問や芸術の面などでは様々に受容さ

れたが、西洋の精神に於ける最後の基礎をなす宗教や哲学は、個々の場合を除いては取入れられ得ず、国民全体の精神的基礎を与へるまでに至らなかつた。故に現在の吾々は、昔の日本人や現在の西洋人のもっている基礎を欠いて居り、精神の基となるものを何も持つてゐないのである⁽³⁶⁾。

そしてそれはまた、恩師である西田幾多郎と自己との世代的な断絶の告白でもあつた。西谷は、特に西田と夏目漱石を挙げ、「自己の中心において自己を打ち破つて、自己を超えた一層深い内面に自己の源を見出そうとする」二人の魅力と、自己の世代との相違を、敗戦後に以下のように語っている。

「それは教養といふだけでなく、一層深く宗教的、求道的であり、知性といふだけではなく一層深く意志的である。漱石や西田先生などの世代におけるそういう態度は、その世代の人々にまだ東洋精神の伝統が基盤になつていたためであるかも知れない。そしてその精神が、流入して来た西洋精神を高く吸ひ上げて、明治の初め以来一つの根本的課題であつた個人における自己の確立といふ方向に大きく開花したのであるかも知れない。そう考えれば、その世代とそれに続く諸世代との間には大きな断層があるともいえる。それはともかくとして、早くから虚無的な心状に落込んでいた私には、初めに漱石によって、次いで西田先生によって、それに抵抗する力が吹込まれた。自分の進み得る唯一つの道しるべを、そこに見出したのである⁽³⁷⁾」。

しかし、西谷が体験したような出会いは、すべての人に起こるものではない。精神的な空虚さに抵抗する力を持つというのは、むしろ異例のことであろう。そして抵抗する力がない場合、人間は、自己の空虚さから逃避して思考停止の状態に陥つたり、空虚な自己を隠そうとして過剰な自己防衛に走つたりするのではないだろうか。日本文化の特殊性を自画自賛する風潮は、そのような人間の心の動きであつたように思えてならないのである。

もしもそうであれば、西田の呼びかけに応じられる精神的基盤は、昭和一〇年代の日本において、あまりに弱かつた、

ということになるであろう。西田の動きは、精神的にも無理があった、と言うべきなのかもしれない。

註

(36) 西谷啓治「現代の精神的空虚と宗教」『西谷啓治著作集』第四卷、創文社、一九八七年、八〇頁。

(37) 西谷啓治「わが師西田幾多郎先生を語る」(一九五一年)『西谷啓治著作集』第九卷、一九八七年、二〇～二二頁。

おわりに

敗戦後の日本は西洋化路線を再開し、今日に至っている。大日本帝国を敗北させる軍事力、機械と技術に支えられた経済力によって、アメリカは敗戦時の日本に圧倒的な印象を与え、その印象が今日まで持続しているのである。アメリカ流の生活様式、アメリカ流の思想とその実践は、日本人の心を大きく揺り動かした。そしてそれとともに、日本文化と西洋文化と東洋文化の関係は、問われること自体を忘れられていったのである。

しかし世界は、一九九〇年頃から大きく変化し続けている。グローバル化と情報化は、この変化の駆動力となっており、世界はたしかに、真に世界的世界となっている。しかも、台湾や東南アジア、中国やインドなどの持続的な経済発展は、欧米中心とは言いにくい時代の到来を証明しているようにも見える。一九九〇年代以降の時代、すなわち現代において、人間は、先人の知恵をどのように活用すべきであろうか。

次々と変化する世界の中で、われわれ現代を生きる人間は、どのような世界文化を作り出していくべきか、どのような

に世界文化を作り出していくべきか。この問題は、西田が生きた時代だけでなく、現在も問われるべき課題である。そして、西洋文化と西洋化以前の文化の関係を再編成し、西洋化と近代化が促進する精神的空虚感にどのように取り組むかは、日本だけでなく、非欧米の多くの地域の課題となっているのではないだろうか。

追記

本稿は、平成二五(二〇一三)年五月一〇日に、台北の中央研究院で開催された国際シンポジウム「東亜近代社会的知識建構」における報告の日本語原稿である。陳瑋芬先生、廖欽彬先生をはじめ、多くの先生方から貴重なご教示を頂戴し、心より御礼申し上げます。報告の表題は、『國體の本義』対『日本文化の問題』——東洋文化と西洋文化の再編成をめぐる対立——である。

また、本稿に関連して、同年一〇月二〇日に東北大学で開催された日本思想史学会二〇一三年度大会で、前記と同じ表題で研究発表を行っている。

本稿の公表はこの日本語版が初めてである。本稿は、台北での報告後に文言が一部修正され、追記されているが、内容に及ぶ修正は行わなかった。なお、國體論史に関連する内容の拙著には、以下のものがある。末尾の拙稿は、昭和戦前期の國體をめぐる政治思想についてのドイツ語での論考である。

- ・『丸山眞男と平泉澄——昭和期日本の政治主義』、柏書房、二〇〇四年。
- ・『日本』への問いをめぐる闘争——京都学派と原理日本社』、柏書房、二〇〇七年。
- ・『昭和の思想』、講談社選書メチエ、二〇一〇年
- ・“Politisches Denken um kokutai in der Showa-Zeit vor 1945” in: Kazuhiro Taki/Michael Wachutka hrsg., Staatsverständnis in Japan. Ideen und Wirklichkeiten des japanischen Staates in der Moderne, Nomos, Baden-Baden, 2016, Pp. 157-173.